

誰にでも魚がたくさん捕れたんですよ。朝から晩までや  
っている人は寒いから、周りのよしの枯れたのを集めて  
そして暖をとって又しっぴいいたわけです。たくさんと  
とそれを町に売りに行ったんですよ。

さて百姓は、この魚をとるだけじゃない。魚とりに来  
た人達が魚と一緒に泥を上げてくれるのが目的だったん  
ですね。つまり田が低いから、魚と一緒に上がる泥が欲  
しかったというわけです。今から考えると全く悠長な話  
ですが、これが何十年何百年と続いて来て、段々と土地  
が高くなってきたんですよ。

ところでこのしっぴきでとれる魚は、寒中の魚ですか  
ら僻が無くてうまいんですよ。だからこれを焼いて「つ  
とこ」に刺して、それを農家などでは旧正月に甘露煮  
にして食べたわけです。小さい鮓の方が大きいより味  
がよかったですね。今みたいに魚がくさくて食えないな  
んてことは全くなかったですよ。

さて話は戻りますが、土浦というところは大町や下田  
町に限らず一帯に土地が低かったんですよ。子供らは水  
が出ると田舎から匂町、本町、菅菜田んぼあたりと舟

に乗って、ずーと遊び回れたものですよ。土浦の町で水  
をかぶらない所なんざいくらもなかった。停車場は一段  
高いでしょう、だからあそこはむぐりませんが、駅に行  
くの舟に乗って行った覚えは十回以上もありますよ。  
だから今の駅前通りは昔よりも一米五〇近くは上ってい  
るでしょう。

こんなわけで土浦には舟持ち船頭又は土取船頭とい  
うのがいくらかあった。桜川の砂利をとって川口まで運ん  
で、それを荷車引きが町に運んで低い所の地上げをした  
わけです。一般の住宅の壁土は、桜川の縁の土を船頭が  
掘って運んだものを使っていたんです。瓦土なども桜川にた  
まった粘土を使いましたよ。川口の今は三平鮓になって  
いる所、あそこには、昔瓦屋があっただけです。ご存じあ  
りませんか？横町にもありました。それから、これは昔  
砂利取りのじいさんから聞いたんですが、砂利にも生き  
砂利と死に砂利があるんだという事でした。

砂利も水の中に入っている中は生きていてくれるけれども、  
陸に上げると魚みたいに死んでしまふ、というんです。生  
きているというのは、水の中で砂利が根々とうつと